

鹿島守之助

国の歴史には、国力が外に向かって活発に拡散する時期と、逆にそれが内に向かって収斂する時期とが、潮の干満のように交互に繰り返されているようである。ここにいう拡散が、国際化を意味するとすれば、収斂は国粹化に通ずるといえよう。

わが鹿島守之助博士は、大正デモクラシーの時代、つまりわが日本が、日清、日露による収斂の過程を経て、華々しく国際化時代を迎えようとした時期に、キャリア外交官として外交界の人となられた。そして、ヨーロッパを舞台に、多感な青年外交官として、卯女夫人を伴い、直接国際問題に触れ、自らも外交案件を処理された。また、その間、数々の貴重な国際的な友情を結ばれもした。

しかし、間もなく日本は、再び大きく音をたてて内に向かって収斂を開始したのである。満州事変から国際連盟脱退、さらに支那事変から太平洋戦争へと全く常軌を逸した悪夢の連続であつ

た。まさにその時代は、日本外交の受難期であり、鹿島博士にとっても、全く手のつけようのない事態の展開であつたにちがいない。その間、博士の重い沈黙が続いたようである。しかし、博士の思索が止まっていたわけではなく、博士の憂国の至情は、外の風浪が激しくなればなるほど、いよいよその深まりを加えておられたように思う。

太平洋戦争の終結と同時に、日本には堤防を切つたような勢いで、再び国際化時代が訪れ、外交が再開されたのである。しかしこの外交の再開は、日本にとつて、自らがその責任を問われなければならぬ戦争のもたらした深いいきずあとを背負つての不幸な再開であつた。日本の国際社会復帰は、したがつて茨の道を歩まねばならなかつた。鹿島博士の活動は、平和の創建という道標を掲げて、戦後時を移さず開始された。しかもそれは、政府の力を当てにされてのものではなく、それは全く博士自身の発意と博士自身の犠牲によるものであつた。その構想は雄大、その規模は壮大で、到底戦禍に疲れた政府のよくするよつなものではなかつた。鹿島平和研究所こそは、廃墟の日本に咲いた優曇華の花のように私には思われたのである。

鹿島研究所は、かくて博士の公的ご活動の中核的な砦となつた。鹿島平和賞は、その中でエメラルドのように光彩を放つ一大ヒットとなつた。そしてそれはノーベル賞の日本版として内外に高く評価されてきた。その受賞者の中には、わが国の優れた先輩ばかりでなく、博士の親友クー

デンホーフ伯やマルコス比大統領夫人が含まれていることは意義深いことであり、嬉しいことでもある。

鹿島平和研究所は、また立派な編輯人を擁して、質量ともに秀れた出版活動を多彩に展開され、わが国の外交思想の普及向上と平和の創建に大きい貢献をなされている。有難いことである。

このたび、卯女夫人が博士によって創始されたこの偉大な事業を継承されることになった。このことを最も喜んでおられるのは、泉下にあられる博士ご自身であろう。それは博士がこの仕事に、鹿島建設に優るとも劣らない期待をもたれているにちがいないと確信するからである。

私は、ここに博士には永遠のやすらぎを、夫人には一層のご多幸を祈りつつ、日本のために鹿島平和研究所の充実と発展を心から祈念するものである